

古代ギリシアにおけるロゴスと芸術

益 田 勇 一[§]

Logos und Kunst im antiken Griechenland

— 序 —

古代ギリシアの美術は、その様式の変遷に応じて大きく四期に分けられるが、本論ではそのうちアルカイック期とクラシック期を扱うことにする。アルカイック期は前700年頃から前480年頃までの時期をさしている。この時期を特徴づける彫刻作品としてクーロス（青年像）を取り上げる。西洋美術の規範として19世紀に至るまで、その歴史を規定することになる古代ギリシア彫刻がここに始まるのである。一方、哲学史的にはミレトス学派から、ヘラクレイトスが活躍した時期までが対応している。ミレトス学派は世界の始源（アルケー）を探求して西洋哲学を開始し、ヘラクレイトス哲学の中核をなすロゴス概念は、彼以降、さまざまに解釈されながら近代哲学の根幹を形成する理性概念へと引き継がれてきた。つまり、近代へと直接つながる西洋の美術と哲学はともにこの時期に始まったといえる。西洋美術の始まりの時期に位置するクーロスと西洋哲学の始まりを印したアルケーやロゴスとのあいだには何らかの関係が見いだされるのではないだろうか。そして、このアルケーの探求やロゴスをめぐる思索に始まるギリ

[§]白鷗大学教育学部

シア哲学を大きく転換させたのはプラトンのイデア論であったが、彼が生きた時代はギリシア美術にとっても転換の時期にあたり、それがクラシック期ということになる。プラトンのイデアとクラシック期の彫刻作品のあいだにも少なからぬ対応関係を見出すことができるように思われる。

1. ミレトス学派のアルケー

ミレトス学派の人々は自然について考察するなかで、そのアルケー (archê) や基本要素 (stoicheion) について言及しており、タレスはそれが水であるとし、アナクシマンドロスは無限定なもの (to apeiron)、アナクシメネスは空気であるとした。しかしここで問題となるのは、アルケーが具体的に何であるかということではなく、そもそもアルケーという言葉によって彼らが思索しようとした事柄である。ミレトス学派の人々は自然についての著作を残したとされるが、現存していない。われわれは彼らの思索を後世の人々の伝承から知ることしかできない。アリストテレスは「あの最初に哲学した人々」という言い方で、ミレトス学派のアルケーについて伝えている。

「すべての存在がそのように存在するのは、それからであり、それらすべてはそれから生成し来たり、その終わりにはまたそれへと消滅していくところのそれ（そこではその実体はそのままそれらすべての基にとどまり、ただその様態にのみ変化が現れる）こうしたそれを、かれらは、すべての存在の基本要素でありアルケーであると言っている」（アリストテレス 1980, 32）

アルケーとはそこからあらゆる事物が生成してくる源であり、また、やがて諸事物が消滅してそこへと還るところのものである。そして、アルケー自体は変化することなく諸事物の根底に共通のものとして有り続ける。こ

こにはすでに、生成変化する世界とその変化のなかで変わることのないものという思索を窺てとることができる。ディオゲネス・ラエルティオスはアナクシマンドロスがアルケーとして提示したアペイロンについて「その部分部分は変化するけれども、全体は不変なもの」（ディオゲネス・ラエルティオス 1984, 117）と考えられていたことを伝えている。アペイロンとは一般に、タレスがアルケーとした「水」とは対照的に、具体的に限定することのできない何かと解釈されている。それが様々な姿を変えることで自然界における諸事物が形成されているが、全体としてそれらはすべてアペイロンによって構成されており、基本要素としてのアペイロンは不変である。アナクシメネスにとって、姿を変えつつもそれ自体はすべてのものの根底にとどまり続けるものは空気である。アナクシマンドロスがアルケーとして提示した「限定することができないもの（アペイロン）」をアナクシメネスは空気であると考えた。空気は希薄化することで火となり、逆に、濃密化することで風となり雲となり、さらに水、土、石へと変化していくとされる（Diels -Kranz 2004, Bd. I, 91）。

アルケーは後に、原理という抽象的な意味で使われるようになるが、ミレトス学派においては、まだ物質的な基本要素として考えられているとするのが妥当であろう。アナクシマンドロスのアペイロンを抽象的な原理のように捉えると、彼の後にアナクシメネスがアルケーを空気としたことは、思索が後退したような印象を受ける。しかし、アペイロンは未だ具体的な何かではないものの、そこからあらゆるものが生じてくるような基本物質であると考えれば、アナクシメネスもアナクシマンドロスも、そしてタレスも基本物質の探求という同じ位相で思考していたということになる。したがって、ミレトス学派が思索した、生成変化する世界とその変化のなかで変わらないものとの関係は、現象世界とその原理や本質といったものではないし、アルケーは、やがてピュタゴラス派が自然のなかに見出すことになる抽象的な数の原理のようなものでもない。アナクシメネスは次のように述べたとされる。

「われわれの魂は空気であり、それがわれわれを支配的にまとめているように、世界（コスモス）全体を氣息（プネウマ）と空気が包括している」（a.a.O., 95）。

この時代における魂は、非物質的なものでも抽象的概念でもなく、空気によって構成された物質的実在であることがわかる。また、アルケーは魂として人間を支配し、全世界を包括しているということから、それは単なる「始まり」、「初めにあるもの」ではなく、人間をそして世界を支配するような、まとめあげるような役割を果たすものであることも看取される。ミレトス学派におけるアルケーとは、そこからすべてのものが生成する始まりであり、生成した諸事物すべてに共通の基本要素としてその根底に有り続け、それらを遍く支配するものとして思索されているといえよう。ハイデガーもアナクシマンドロスについての論考のなかで、アルケーを始源とは訳さずに「支配」としている（Heidegger, Bd.51, § 23）。

2. ヘラクレイトスのロゴス

ミレトス学派の後、前6世紀から前5世紀にかけて活躍したヘラクレイトスは、火をアルケーと考えたとされる（アリストテレス 1980, 34）。ディオゲネスの伝えるところによると、あらゆるものは火から生まれ、世界は火の転換物である。火が濃密化することで湿り気を帯びて水となり、水が凝結すると土に変わる。逆に、土が溶解すると水が生じ、水からあらゆるものが生成される。そして水は蒸発して（特に海からの蒸気）火へと還る（ディオゲネス 1994, 96-7）。ミレトス学派同様、ヘラクレイトスにおいてもアルケーはそこからすべてのものが生じ、それらが解体して還るところものを意味していることがわかる。また、アナクシメネスが魂を空気であるとしたのと同じように、ヘラクレイトスは「水から魂は生ずる」（Diels-Kranz 2004, Bd. I, 159）として、魂を「思慮を備えた蒸気」（a.a.O., 154）と考え

たとえられる。それでは、ヘラクレイトスにおいても火としてのアルケーはそこから生成してくる諸事物すべてを支配するものと見なされるのかというと、そうではなく、彼にとって万物を支配するものは「ロゴス (logos)」と呼ばれる⁽¹⁾。ミレトス学派は、アルケーからの万物の生成について、希薄化と濃密化という言い方で説明するものの、そのメカニズムを具体的に示したわけではなかった。ヘラクレイトスにおいては、希薄化と濃密化のほかに、あらゆるものは運命によって生じるという言い方も見られる (a.a.O., 145)。運命とは人間の意志や力を超えた作用であり、それによってわれわれが、また世界が定められ、「支配」を受けることを意味する。ヘラクレイトスは世界にこの運命を課する実体を「万有の本質を通じて行き渡るロゴス」(a.a.O., 145) であるとするので、世界の生成に関する新たな説明に踏み出すのである。ヘラクレイトスにとって、アルケーとしての火からの万物の生成—火から蒸気 (空気)、蒸気から水、水から土が生じること—にはロゴスが関与していることになる。

ロゴスはさまざまな意味—言葉、言表、計算、理性、判断、原理、比例等々—で用いられた。よく知られた用法としては、「ヨハネによる福音書」の冒頭での「はじめに言葉 (ロゴス) があった」があげられるだろう。また、ロゴスのラテン語訳のratioは理性や判断という意味で使われることが多い。しかし、ロゴスに関する最初の思索者とされるヘラクレイトスは言葉や理性といったよく知られた意味でこの語を使ったわけではなかった。

ミレトス学派の人々がアルケーの探求を思索の中心に据えたとすれば、ヘラクレイトスはそれに代えてロゴスを、あるいはアルケーとの関わりにおいてロゴスを思索したといえよう。ヘラクレイトスは断片1において、次のようにロゴスに言及している。

「ロゴスはここに示されているのに、人々は、それを聞く以前にも、ひとたび聞いてのちにも、けっして理解するようにならない。というのも、すべてのものごとは、このロゴスに従って生起しているのに、人々はそれを経

験していないも同然で、しばしば、そうした言葉 (epos) や事の成り行き (ergon) について経験していてもそうなのだ。それぞれのものごとをその本性にしたがって、それらがどのような状態にあるかを、わたしが分析し、明確になるようにして、そうした言葉や事の成り行きを論じているのに「そうなのだ」(a.a.O., 150)。

文頭でロゴスは聞くものとして語られていることから、それが言葉を意味するとも思われるが、すぐ後の文中では言葉を意味する語としてエポス (epos) が使われており、ロゴスとは言われていない。「ロゴスを聞く (akouō)」とは比喩的な言いまわしとも考えられる。重要なのは「すべてのものごとは、このロゴスに従って生起している (ginomai)」という部分である。ロゴスとはそれに従ってすべてのものが生起するところのものであると言われている。ginomaiとは何かが生じること、存在するようになることを意味する。すべてのものがそこから生じてくる場所のアルケーとの関係をここに見ることができる。世界の始源としてのアルケーは物質であった。ヘラクレイトスにとってもアルケーは物質、すなわち火である。アルケーから何かが生じてくる際に、例えば火から蒸気 (水) が、さらにその水から土が生じる際に、アルケーからそれらを生じせしめるものがロゴスであり、その生成を支配し、可能にする原理がロゴスであるとヘラクレイトスは言っているように思える。断片31はこの考えを支持している。すなわちそこでは、火が「万物を支配するロゴス」によって、世界秩序形成の核となる湿ったもの (水) へと転化することが述べられている (a.a.O., 158)。ロゴスはもはや、それ自身が何かへと転化するアルケーのような物質ではない。それが非物質的な原理、法則のような性質のものであるとするなら、それは見たり、触れたりできるものではなく、「聞く」ものなのかもしれない。

次の断片2においてもロゴスについて語られている。

「それゆえ、共通のもの(koinos)に従わなければならない。ロゴスこそ共通のものであるにもかかわらず、多くの人々は、自分独自の考えを有するかのごとく生きている」(a.a.O., 151)。

断片1のロゴスが、世界の生成や自然現象を支配する共通の原理として述べられていたのに対して、ここでは、人間の行為や生き方を支配する共通のものとして言及されているように思われる。ヘラクレイトスのロゴスとは、自然を支配する原理であり、また人間が従うべき共通の規範であると考えられる。原理や規範という言葉が、西洋形而上学が生まれる前の時代に馴染まないということであれば、自然現象を支配する共通のもの、人間を人間として有らしめる共通のものを、ヘラクレイトスはロゴスとして思索したといってもよいであろう。やがて、ヘラクレイトスからは遠く隔たったところで、ロゴスはratio（理性）と訳され、人間に共通の本性を示す言葉となったわけであるが、ヘラクレイトスにとって自然の、そして人間の、つまり世界の共通の本性を名ざすロゴスとは具体的にどのようなものであったのか。その手がかりは断片50にある。

「私に聞くのではなく、ロゴスに聞いて、すべてのものは一つである (hen panta einai) という、ロゴスに同意するのが賢いことだ」(a.a.O., 161)。

ここには、世界についてのロゴスの教えが述べられており、それに耳を傾けると「一が万物である」という知恵を獲得することができる。ロゴスとは世界の本性を示すことであり、その本性とは、世界のうちに存在するあらゆるものは、結局のところ、一であるということだ。それでは「一が万物である」という教えは何を意味するのか。

ヘラクレイトスにとって世界は火の転換物であった。万物はアルケーとしての火から生成し、やがて消滅して火へと還る。この生成と消滅の世界過程を支配するのがロゴスであった。つまり世界の多様性（万物の生成）

は、ヘラクレイトスにとって、火という一なるものの転換の結果であり、世界そのものが火の変容である。そして、火の燃焼を制御しているのがロゴスである。

「大地は分解して海となるが、その海の分量は、以前に海が大地となったときと同じロゴスで量られる」(a.a.O., 158)

ここでロゴスは一般に、比率や割合と訳されるが、「万物を支配するロゴス」というヘラクレイトスの思考に則して考えれば、割合を決めるのがロゴスであると読むことができる。大地が海へと転換する際に、かつて海から大地へと転換するとき決められた分量と同じ量の大地がロゴスに従って海へと転換してゆくということである。

3. ロゴスの現われとしてのクーロス

このようにヘラクレイトスは、世界の始源としての物質的なアルケーの探求というミレトス学派の思索をさらに進めて、そのアルケーからの世界の生成を支配する原理、自然や人間にとって共通の本性としてのロゴスという概念を提示した。そしてロゴスは「一が万物である」という教えを示していた。一方、アルカイック期を代表する彫刻作品であるクーロスは、ヘラクレイトスとは異なる仕方で「一なるもの」を示しているように思われる。クーロスとは青年像を意味し、一つの定型に従って造られている。定型とは直立の姿勢である。すべてのクーロスは直立して正面を見据え、両腕を体側につけ、かるくこぶしを握る。体重は両足に均等にかかるが、左足が半歩前に出る姿勢で直立している。正面を向いた顔には、杏仁型の目が刻まれ、口元にはアルカイック・スマイルが表現されている。これらの特徴、そして裸体であることもすべてのクーロスに共通である。アルカイック・スマイルは微笑みの表情を表現したというよりも、石の像に生命感を

与えるためのものだとされる。生命を与えられた人間が、直立して世界へと歩みだしていく瞬間を、クーロスは表現しているように思われる。もちろん、クーロスにはそれが出土した場所によって、制作された目的が知られている。神殿から出土したものは神々への奉納像としてつくられたことが、また、墓地から出土したものについては、死者を悼むための墓像としての性格が容易に想像される。奉納像や墓像としてつくられた像が、すべて同じ型で表現される必然性は、その目的からは理解しがたい。奉納する神々はそれぞれ異なるわけであるし、死者は亡くなった年齢の異なるさまざまな人間である。しかも、この同じ型が、ミレトス学派からヘラクレイトスが生きた時代まで、紀元前7世紀から6世紀にかけて、そのまま維持され続けたのである。クーロスの同型性にはやはり「一が万物である」という思考が、またそれが直立して歩みだそうとする姿には人間としての共通の本性が、つまり、クーロスにはヘラクレイトスのいうところのロゴスが認められるのではないだろうか。

4. プラトンのイデア論とポリュクレイトスのカノン

ミレトス学派が存在するものの根拠を探求するなかで、水、アペイロン、空気といった物質的なアルケーに到達し、ヘラクレイトスは物質的アルケーとしての「火」を提示しながらも、さらに一步進めて火が空気や水、土へと転換すること、アルケーから存在するものが次々に生じてくること、つまり、自然が生成変化することの背景には、それを支配する原理があることに言及し、それをロゴスと呼んだ。また、これらの物質的アルケーに代わって「数」という非物質的なアルケーを提示したのがピュタゴラス学派であった。

ピュタゴラスは前570年頃にミレトスにも近いサモス島で生まれ、エジプトやクレタ島に滞在した時期を経て、南イタリアのクロトンに移り、最後はメタポンティオンで亡くなったとされる（ディオゲネス1994, 13, 42）。

ディオゲネスはピュタゴラスが3冊の著作（『教育論』『政治論』『自然論』）を残したとしているが（前掲書, 17）、一般には、彼自身は著作を残さず、彼の弟子たちが書き残したり、彼らの口述を聞いた当時の哲学者たちが自らの著作のなかでその教えを取り上げるというかたちで伝承されてきたものが、ピュタゴラス派の教説として今日われわれが目にしており、それと考へられている。その教説によれば、自然において第一のものは数であり、数学の原理があらゆる存在の原理であるとされる（アリストテレス 1980, 40）。しかし、ピュタゴラス派のいう「数」は今日われわれが理解している量を表わす観念としての数、自然現象を数式化する際の数とは異なる側面をもっている。ディオゲネスによれば²⁾、ピュタゴラス派は万物の始源を一（monas）であるとし、その一から二が生じ、一と二から数が生じ、そして数から点が、点から線が、線から平面が、平面から立体が、立体から感覚される物体が生じてくると考へたとされている（ディオゲネス 1994, 31）。ここにいわれているアルケーとしての数は、そこから最終的には物質が生じるとされることから、質料的性質をもつことは明らかであり、ミレトス学派の物質的アルケーに通じる側面を有している。しかしもちろん、このような質料的な性質ばかりがピュタゴラス派の数を規定するわけではなく、ピュタゴラスの定理に示される幾何学的原理、弦の長さと言階との数的関係への言及にみられる数の観念的性質は、われわれが理解するそれと変わるところはない。したがって、ピュタゴラス派の提示した世界のアルケーとしての数は、完全には非物質的な原理とはいえず、質料的なアルケーの性質を残しつつ、未だミレトス学派の思索の圏域を脱してはいないが、新たな理念的アルケー概念への方向性を示したと考へられる。完全に物質世界から独立した理念的なアルケーについては、プラトンのイデア論を俟たなければならない。

プラトンにおいてアルケーは物質的世界から完全に切り離され、純粹に理念的な存在となり、イデアと呼ばれようになる。プラトンは世界の始源（アルケー）の探求というミレトス学派の素朴な問題意識に留まらず、現実

世界を成立させる根拠、存在するものの原因という未だアルケー的な要素を残した視点からさらに発展して、存在者が目指すところの目的、その価値、理想という多様な意味を与えられるアイデアの探求へと向かった。

ミレトス学派の間いは、世界はどのようにして成り立っているのかというものであり、それに対する答えは、世界は自然物を構成する基本要素 (stoicheion) すなわちアルケーが様々に姿を変えることによって成立しているというものであった。プラトンもまた、この基本要素による自然界の構成という考え方を受け継いでおり、彼が提示した基本要素は火・水・空気・土の4種類である (Plato 2005 Timaios 32B, 48B)。ミレトス学派以降、プラトンへと至る古代ギリシアの哲学者たちは、この物質的な基本要素をアルケー (複数の場合はアルカイ) と呼び、世界がそこから生成してくる始まりと考えたわけであるが、プラトンは物質的アルケーを自然界の始まりとしては認めながら、さらにこれらのアルカイ相互の結合と分離を支配する原理へと思考をすすめて、この原理をアイデアとして捉えた。そうであるなら、このアイデアはすでにヘラクレイトスによって「万物を支配するロゴス」として言及されていたことになる。つまり、プラトンにおいてロゴスはアイデアと呼びかえられることになったのである。

物質的なアルカイとは別にそれらを支配するアイデアが想定されることによって、また、ロゴスがアイデアと読み替えられることによって何が起きたのか。まず第一に、世界は基本要素によって構成される自然界 (宇宙) と、それとは独立したアイデア界に分裂する。ここですでに、「すべてのものは一つである」というヘラクレイトスのロゴスの教えは破られる。そして、アイデア界と自然界は原型 (paradeigma) と似像 (eikōn) の関係にある。神³⁾は宇宙を創造する際に、アイデアを原型としてそれに似せた世界を作り上げたとされる (a.a.O. 29A-B)。プラトンが『ティマイオス』において展開した宇宙創成の物語は、神がアイデアを手本にしながらいそれを創造原理として一基本要素 (火・水・空気・土) を組み合わせ、アイデア界と類似したかたちで自然界を構築したという構造をもっている。つまり、宇宙は常にあっ

たものではなく、ある時点において生み出されたもの(*geneseōs*)、生成したもの(*gegonos*)であり、始まり(アルケー)を有する。興味深いことにプラトンは、宇宙に始まりがあり、それが生成したものである根拠として神による創造ではなく、それが見られるもの、触れられるもの、物体性を具えたものであること、つまり、感覚によって捉えられるものであることをあげている(a.a.O.28B)。プラトンにとって感覚によって捉えられるものは、生成、消滅をくり返し、真にあることがけっしてない(*ontōs oudepote on*)ものである。それでは、真にあるものとはどのようなものか。それは、生成することなく、同一を保ち、常にあるもの(*on aei*)であり、感覚によってではなく、ロゴスの助けをかりて知性(*noēsis*)によって捉えられる(a.a.O. 27D-28A)。この真にあるものがアイデアと呼ばれる。

このように、プラトンの構想した世界は、物質によって構成され、生成と消滅をくり返しながら常に変化し、感覚によって捉えられる自然界と知性によって捉えられ、永遠に変わることなく常にあるアイデア界から成立している。そこには、世界を「存在」(常にあるもの)として捉えたパルメニデスと、「生成」として捉えたヘラクレイトスの世界観が融合されている。しかしそれは、単に二つの世界観をうまく組み合わせただけではなく、そこに新たに価値評価という観点を持ち込み、アイデア界を自然界よりも優れた価値ある世界として位置づけた。生成変化するものより、永遠に変わらないものが、感覚よりも知性が、そして自然界よりもアイデア界が価値あるものとされる。これが、世界をアルケーから思索したミレトス学派やアルケーとそれを支配するロゴスから思索したヘラクレイトスに代表される、いわゆるソクラテス以前の哲学と比較して、プラトンのアイデア論によって新たに生じた第二の事柄である。アイデアこそが「真にある」ものであり、自然界はそこから派生したものにすぎない。『国家』において語られた「洞窟の比喩」はこのことを明確に示している(Plato 2000 *Politeia* 514A-517C)。それによれば、われわれが見たり触れたりして知ることができる現実の世界は、真にあるもの(アイデア)の影のようなものである。また、その影の

ような現実世界を模倣して描かれた画家の作品は、現実よりもさらに真実（アイデア）から遠いものになってしまうとして、プラトンは絵画を高く評価しない（a.a.O. 597E, 598B）。

さて、現実世界から見れば、その原型となり、永遠に変わることなく真にあるものとしてのアイデアは理想であるといえよう。「すべてのものは一つである」という世界観においては、より価値があるという発想は生じてこない。世界が二つに分裂することによってはじめて、そこに価値や優劣の序列が持ち込まれることになる。プラトンによれば、現実世界における美しいものは、美そのもの（美のアイデア）を分有する（metechō）ことによって美しい（Plato 2001 Phaidōn 100C）。つまり、自然界にある美しいものが美しい原因（根拠）は美のアイデアに求められる。この点においては、自然とは何かを問い、存在するものの根拠を探求し、それをアルケーという言葉で言い表した哲学者たちと、プラトンのアイデア論は同じ問題意識を共有している。しかしプラトンは、アイデアを最高の価値を有するものとして現実世界から分離し、さらに現実世界のなかにもより価値あるものとそうでないものの序列を持ち込むことで、全体としては、いわば地上からアイデア界へと上昇する価値の階梯を設定したのである。例えば、美の階梯は物質的・肉体的な美から精神的な美へ、そして最終的には最高の美である美のアイデアへとつながっている（Plato 1996 Symposion 211C）。こうして美のアイデアは、地上から仰ぎ見られる美の理想として輝きを放つことになる。

物質的アルケーの探求から、それらを支配・統一するロゴスという原理の発見へと進んだ哲学の歴史に、プラトンが現実世界を成立させる根拠であると同時に、その理想の姿を示すアイデアという概念を持ち込んだ時代と並行して、ギリシア美術も、クーロスに代表されるアルカイック期から大きな変化を遂げ、新しい時代を迎える。プラトンが生きた紀元前5世紀から4世紀にかけては、美術史上ではクラシック期と呼ばれ、古代ギリシア美術の歴史のなかでも最も優れた作品がつくられた時代である。ルネサンス

から19世紀に至るヨーロッパの造形作家が制作の規範を求めたのはまさにこの時代であり、古典としての価値は現在も失われてはいない。クラシック期はとりわけすぐれた彫刻家を輩出しているが、そのなかでもプラトンとほぼ同時代を生きたポリュクレイトス⁽⁴⁾を取り上げる。

クラシック期における彫刻作品の特色は理想美を追求し、高いレベルでそれを実現することで古代ギリシア美術の頂点を形成したところにある。とくに、ポリュクレイトスは理想的な人体の美とはいかにあるべきかを追求したとされ、それは彼の作品として実現され、また、残念ながら現存はしない著作『カノン』において理論的に展開されたと伝えられている。ガレノス⁽⁵⁾は、身体健康とはその基本要素である熱・冷・乾・湿のうちに均衡が生まれることであるという説を紹介した箇所、身体の美しさは同様に、身体の諸部分の均衡 (symmetria) のうちに生じるという説にも触れ、この均衡についてはポリュクレイトスの『カノン』に書かれており、彼はその均衡についての理論を実作品で証明したと述べている (Diels-Kranz 2004, 391)。ここで身体諸部分の均衡とはコントラポスト、実作品とは彼の代表作である「ドリュフォロス (槍をかつぐ青年)」や「ディアデュメノス (勝利の鉢巻を結ぶ青年)」を指すものと思われる。コントラポストは対比的均衡と訳され、身体の左右の手足の動き、上半身と下半身の動きを対比させながら全体としてのバランスを取っていく彫像の手法である。単にバランスを取るだけであるならば、クーロスのように左右対称の姿勢をつくればよいが、それでは動勢を表現することができない。そこで、クラシック期の彫刻家は対称性を崩しながらも全体としては均衡を保つような身体の動きを追求したが、その完成者がポリュクレイトスであるとされている。

ポリュクレイトスの著作は失われてしまったが、ガレノスの記述のように、その内容は彼の作品に具現されているとすれば、作品から著作内容の幾分かを推測することができるということになる。とくに「ドリュフォロス」は芸術家たちにカノン (規範) と呼ばれ、称賛されたとされるので (Diels-Kranz a.a.O.)、そこから彼の彫像制作の規範を読み取ることが可能である

う。「ドリュフォロス」のオリジナルはブロンズ製であるが、現存しないので大理石によるローマン・コピーを参照すると、まず、全体のプロポーションは7頭身でつくられており、これが彼の考えた理想のプロポーションといえる。上半身は胸や腹部に適度な筋肉がつけられ、よく鍛えられたスポーツ選手の引き締まった肉体を思わせる。下半身は両足にやはり適度な肉付けが施され、しなやかさと力強さをそなえつつ上体を支えている。そしてコントラポストであるが、槍を肩にかけるように左腕で握る姿勢を取り、右腕は体側に沿っておろすことで、両肩を結ぶラインはやや左上がりになっている。それに対して、右脚に体重を乗せ、左脚は膝を曲げながら後ろに引いてつま先だけを地面につける姿勢を取ることで、腰骨を結ぶラインが肩のラインとは逆に右上がりになるようにつくられている。このように、身体の左右の位置関係の対称性を崩しながら、肩のラインと腰骨のラインを対比させながら、全体としては均衡を保ちつつ動勢を表現することに成功している。

こうしてポリュクレイトスは人体彫刻の規範をつくりあげた。それはルネサンスの彫刻に受け継がれ、さらに18世紀から19世紀にかけての新古典主義にも引き継がれてきた。そして現代でも、アカデミックな技術習得の場面では、この規範は生きている。ポリュクレイトスのカノンが時代を超えて受け継がれているのは、それが多くの人々の美の理想と一致するからであろう。そして、こうした規範や理想という考え方は、彼と同時代のプラトンがアイデアという観念形式でギリシア世界にもたらしたものであった。ポリュクレイトスは文字どおり、プラトンの美のアイデアの存在を現実の形にして見せたといえよう⁶⁾。

－ 結び －

「すべてのものは一つである」というヘラクレイトスによるロゴスの教えは、同時代の彫刻作品であるクーロスの同型性と対応していた。パルメニ

デスの「真に在るものは生成することも消滅することもない」という思想、ピュタゴラスの「変化する現象のなかでの変わることのない数の原理」、ヘラクレイトスの「世界は常に移り変わりながらも一つである」という思想を総合してプラトンは、変わることのない原型としてのアイデアの世界と、その似像として製作され、常に変化するわれわれの宇宙という二元論的世界観を構想し、理想としてのアイデアという新たな視点が持ち込んだ。それは、理想美を追求するという同時代の新しい造形芸術の動向と対応していた。アルケーやロゴスという哲学的な中心概念が、アイデア論という新たな思想へと移行するのと対応するかのよう、アルカイック様式がクラシック様式へと変化する様子を見てきたわけであるが、この対応は偶然であろうか。こうした対応はアリストテレスの質料—形相論とヘレニズム芸術との関係、ロゴスが理性という意味で使われるようになった17世紀における近世哲学のはじまりと宗教から自律した新たな芸術のはじまり、20世紀におけるロゴス中心主義、理性中心主義批判とダダに代表される反理性主義、反合理主義の芸術との関係、というようにそれぞれの時代で哲学と芸術が呼応しながら変遷していく姿として観て取ることができる。そこには、ロゴスからアイデア、アイデアから形相、理性としてのロゴスから理性批判あるいはロゴスの喪失というロゴスの変遷があるように思えるが、プラトン以降のロゴスの行方についてはあらためて論じなければならない。

【引用文献】

Diels-Kranz, *Fragmente der Vorsokratiker*, Bd. I, Zürich, 2004.

Heidegger, *Gesamtausgabe*, Bd.51.

Loeb Classical Library Plato III, London, 1996

Loeb Classical Library Plato VI, London, 2000

Loeb Classical Library Plato I, London, 2001

Loeb Classical Library Plato IX, London, 2005

アリストテレス『形而上学』(上)、出 隆訳、岩波文庫、1980。

ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』(上)、加来彰俊訳、岩波文庫、1984。
ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』(下)、加来彰俊訳、岩波文庫、1994。
ディールス・クランツ『ソクラテス以前哲学者断片集 第1分冊』岩波書店、1996。

【註】

- (1) 後に述べるように、断片31には「万物を支配する(dioikeō) ロゴス」という記述がみられる。
Diels-Kranz 2004,158.
- (2) 厳密には、アレクサンドロス・ポリュイストールが『哲学者たちの系譜』において言及したピュタゴラス派の学説をディオゲネスが紹介したもの。
- (3) ここで神(theos)は宗教的意味をもつわけではなく、構築者(demiurgos)や創造者(poietes)という言い方も使われており、まさに宇宙をアイデアという設計図を基に構築した存在者ということである。
- (4) ポリュクレイトスは紀元前5世紀半ばすぎに活躍した青銅彫刻家。プラトンの著作のなかでも言及されている。(『プロタゴラス』311C,328C)
- (5) ガレノス(Galēnos 129頃-199)、古代ローマ時代の医学者で古代ギリシア以来の医学を集大成して解剖学・生理学の基礎を築いた。中世を通じて医学の権威であり続けた。
- (6) アイデア(idea)は動詞のeidō(見る)から派生した言葉で、見られたもの、見られた形を意味する。プラトンのいうところの宇宙の創造者は、まさにアイデアという理想的な形を規範にわれわれの世界を創ったのである。